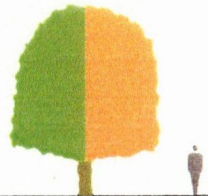
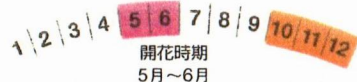


尻無川之錦秋を詩う

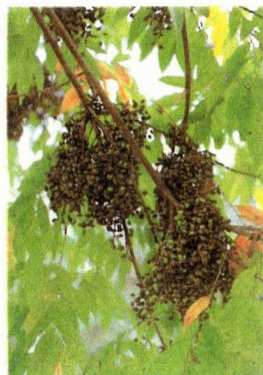
研 究 会

# ハゼ 黄櫨

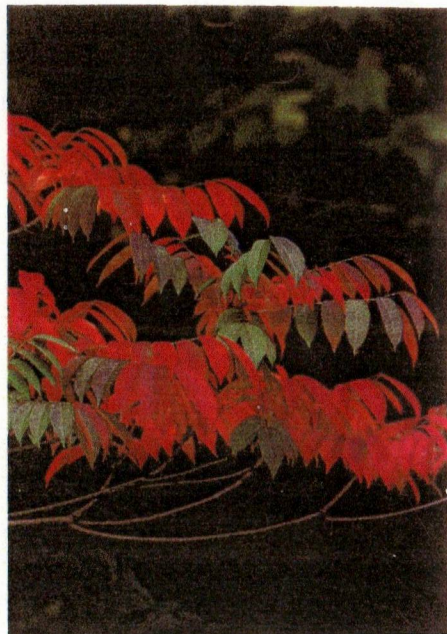
分類 ウルシ科ウルシ属  
学名 *Rhus succedanea* Linn.  
別名 ハゼノキ、リュウキュウハゼ、ロウノキ  
分布 本州、四国、九州、沖縄、中国、台湾、東南アジア



樹形:半球形  
樹高:10m/落葉高木



果皮からロウをとる



暖地でも見事に紅葉するハゼ

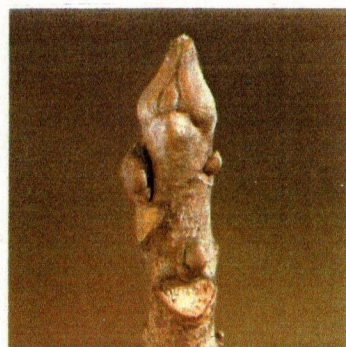
ハゼノキ〔櫨木〕(学名 *Rhus succedanea*)  
ウルシ科の落葉高木。高さ一〇以上に達する。葉は枝先近くに集まってつき、四〜六対の小葉からなる奇数羽状複葉。小葉は卵状披針形で長さ六〜八センチ、全縁で先は鋭くとがり、毛はない。秋、美しく紅葉する。雌雄異株。五〜六月、枝先近くの葉腋に円錐花序をつくり、小さな黄緑色花を多数開く。雌花、雄花ともに萼片、花弁各五枚。雄花は雄しべ五本、雌花は退化した雄しべ五本と一本の雌しべがある。核果は白色、扁平な腎臓形で径約一センチ。果皮は蠟を含み、これから木蠟をつくるので、別名ロウノキともいう。近縁種のヤマハゼによく似るが、ヤマハゼは葉裏に毛が生えるので区別できる。

中国、インドシナ原産で、琉球から最初に渡来したので、リュウキュウハゼの名もある。現在本州から九州に野生しているのは、古くから蠟をとるために植栽されていたものが逸出したものとされている。

〈古澤潔夫〉



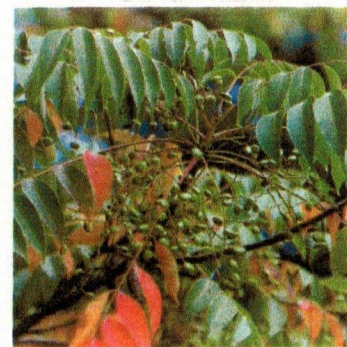
写真：右=果実時、



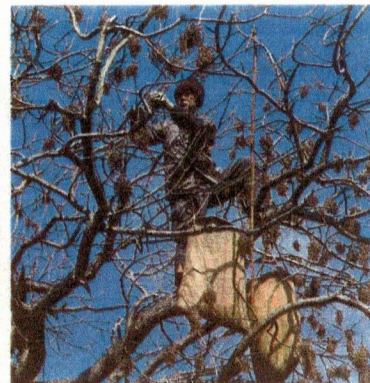
冬芽は広卵形、3～5枚の芽鱗に包まれる



雄花の雄ずいは5本、雌ずいは小さい



核果は扁円形で径8～10mm



ハゼノキ (左)紅葉 (右)冬、果実を採集し、蠶を抽出し、木蠶をつくる



⬆ 浪花百景

～しりなし漆づつみ甚兵衛の小家～

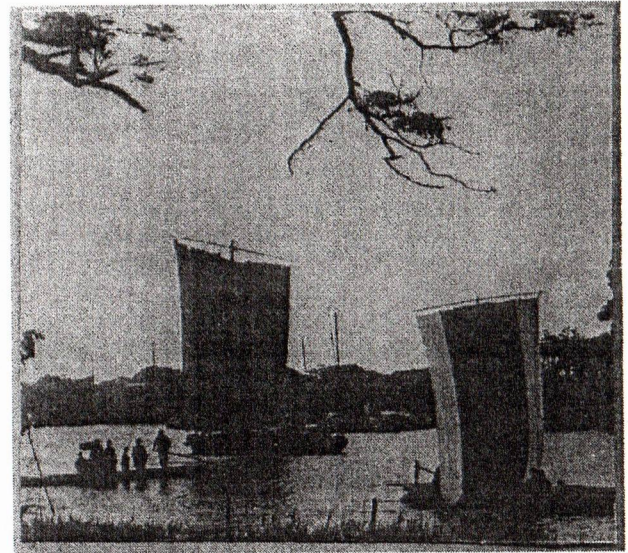
(なにわの海の時空館所蔵)

『文化史』ハゼの古名はハジで、『日本書紀』には「梶、此をば波首と云ふ」と出る(巻二・初代下)。ハゼでつくったはじ弓は『古事記』(上巻)、『万葉集』(巻二〇・四四六五)にみられる。古代のハゼはヤマハゼあるいはヤマウルシである。現名のハゼノキ(リュウキウハゼ)の本土への渡来は、神谷宗湛(一五三一―一六三三)が肥前(佐賀県)唐津や筑前(福岡県)に導入、永禄年間(一五六七)大隅(鹿児島県)根占村雄川に、一六四五年(正保二)桜島に伝来など諸説がある。室町時代のころからウルシやヤマウルシの蠟でろうそくがつくられ始め、リュウキウハゼによるハゼ蠟はろうそくの生産を安定させたが、それでも量は少なく、高価で、江戸時代を通じ、普段使用されることはなかった。

〈湯浅浩史〉



②春は汐千狩 秋は櫛の紅葉 沙魚釣  
に賑わう 尻無川櫛堤。



⑦尻無川右岸にあった甚兵衛茶屋付  
近。

尻無川には渡船場四ヶ所ある。  
〔三軒家町〕市岡町 中の渡〔泉尾濱通り〕南市岡町

甚平渡〔北恩加島町〕南市岡町 福崎の渡〔新千歳町〕福崎町

甚平渡はかつてこの渡場附近に甚平小屋あり尻無川の楡紅葉をこの小屋に憩ひ乍ら觀賞し旅情を慰めたところであつた。

尻 無 田中君業

甚翁、廬在<sup>リ</sup>第三灣<sup>ニ</sup>

醉<sup>ウテ</sup>喫<sup>ス</sup>蛤<sup>ス</sup>羹<sup>ス</sup>霜<sup>そうじゆ</sup>樹<sup>じゆ</sup>間<sup>かん</sup>

堤上舟中紅一色

夕陽楡葉又酡<sup>た</sup>顔

甚翁の廬第三灣に在り

酔うて喫す蛤羹霜樹の間

堤上舟中紅一色

夕陽楡葉又酡顔

甚じいさんの家は第三湾の所に在りて

酔つて蛤の汁を紅葉の所で飲んでゐる。

堤防と舟には夕月の紅の光が一色となり

楡<sup>はせ</sup>とまた顔が酔つて赤く染まてゐる。

尻無川

廣瀬旭莊

遠山西隱寒雲繞ル

遠山西に隠れ寒雲繞る

孤鶴南飛秋色杳ヲリ

孤鶴南に飛び秋色杳たり

夾水兩行紅樹間

水を夾む兩行紅樹の間

釣鯊舟過知多少

釣鯊を釣る舟過ぎること多少かを  
知らん

遠くの山が西に隠れ、寒い冬雲が繞る。

一羽の鶴が南に飛び、秋の気配が深い。

水を夾む両道にはもみじの樹があり、その間を

はぜを釣る舟がたくさん通り過ぎる。

無 聲 川

筱崎武江

罷<sup>メ</sup>釣<sup>ヲ</sup>停<sup>メ</sup>舟<sup>ヲ</sup>看<sup>ル</sup>暮<sup>ニ</sup>山<sup>ヲ</sup>

模<sup>タル</sup>糊帆影有無間

晚潮一綫通<sup>ジ</sup>歸路

撐<sup>ニ</sup>出<sup>ス</sup>荻花<sup>ニ</sup>楓葉<sup>ノ</sup>灣

釣<sup>ツ</sup>りを止<sup>ヤ</sup>め舟<sup>フネ</sup>を停<sup>ト</sup>め暮<sup>ホ</sup>山<sup>オン</sup>を看<sup>ク</sup>

模<sup>モ</sup>糊<sup>コ</sup>たる帆<sup>はん</sup>影<sup>えい</sup>有<sup>ゆう</sup>無<sup>む</sup>の間<sup>かん</sup>

晚<sup>ばん</sup>潮<sup>ちゆう</sup>一<sup>いつ</sup>綫<sup>せん</sup>歸<sup>き</sup>路<sup>ろ</sup>通<sup>つう</sup>じ

荻<sup>てき</sup>花<sup>か</sup>に撐<sup>ちゆう</sup>出<sup>しゆう</sup>す楓<sup>ふう</sup>葉<sup>よう</sup>の灣<sup>わん</sup>

釣<sup>ツ</sup>りを止<sup>メ</sup>め、舟<sup>フネ</sup>を停<sup>ト</sup>めて暮<sup>ホ</sup>れ<sup>の</sup>山<sup>オン</sup>を<sup>ミ</sup>る。

模<sup>モ</sup>糊<sup>コ</sup>とし<sup>た</sup>中<sup>ちゆう</sup>に舟<sup>ふね</sup>の帆<sup>はん</sup>の影<sup>えい</sup>がう<sup>す</sup>らと見<sup>ミ</sup>える。

晚<sup>ばん</sup>の潮<sup>しゆう</sup>はお<sup>だ</sup>やかで一<sup>いつ</sup>つ<sup>の</sup>線<sup>せん</sup>の様<sup>よう</sup>で歸<sup>き</sup>る道<sup>みち</sup>に続<sup>つづ</sup>く。

荻<sup>てき</sup>の化<sup>け</sup>の間<sup>かん</sup>に棹<sup>しゆう</sup>をさ<sup>す</sup>す楓<sup>ふう</sup>の美<sup>み</sup>しい灣<sup>わん</sup>